

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690200106		
法人名	医療法人 三幸会		
事業所名	ケアサポートセンター千本今出川		
所在地	京都府京都市上京区元誓願寺通千本東入元四丁目424番地の2		
自己評価作成日	平成28年2月21日	評価結果市町村受理日	平成28年4月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigyosyoCd=2690200106-00&PrefCd=26&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人京都ボランティア協会
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1階
訪問調査日	平成28年3月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

西陣で京町屋の雰囲気を大切にしたい建物になっており、事業所内も木の温もりを大切にしたい家具を使用している。小規模多機能との併設施設である点を活かして合同で季節の行事やレクを行い、普段から行き来して、利用者同士での交流を持っている。また児童館との交流も定期的に行い、地域との関わりも持つようにしている。日常生活では入居者の能力を活かせるように、食事準備をはじめ、様々なことを一緒に行うようにしている。月に2回のフラワーセラピーや野菜・花の育成、金魚の飼育なども行い、入居者に役割を持ってもらうと同時に、共に自然や育てる喜びを感じられるように工夫している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設から4年目を迎え、利用者の状態の変化はあるが利用者・職員共に固定化がみられる。日中のほとんどをリビングで過ごされる利用者も多く、それぞれのできることを職員とともに行っている。運営推進会議の中で、家族からさまざまな意見が出る。これらの意見から業務の見直しの必要性を感じ、アンケート調査を利用者・家族・施設に係わりのある外部の人から行い、分析・評価し改善に繋げている。この結果は法人研究報告会や家族会・運営推進会議で報告している。職員は聞く姿勢・行動力がある。また、事業所の玄関は旋錠はしていない。利用者が外に出かけるのではないかと懸念があった時は、ヒヤリ・ハットに書き職員間で注意を促し合い、拘束をしない意志統一とケアの統一を図っている。利用者主体で日常生活に取り組む職員の姿勢がある。施設内には、フラワーセラピーで生けられた花があちこちに飾られ春の訪れを告げている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「一日一笑」「一喜一憂」「一期一会」を事業所の理念としており、家族や入居者との出会い、想いを受け止めて共有し、安心して生活出来るような支援に繋げていけるように努めている。	理念は、開設時の職員で話し合い決められた。パンフレット・ホームページで明示すると共に玄関にも掲示している。グループホームでの出会いを大切に、利用者の笑顔を引き出す話題を心掛けている。年度始めの会議で確認をとり、カンファレンスで利用者のケアを考える時には、理念に沿っているか振り返りをしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	月に1回、児童館の子ども達との交流があり、毎日の食料は開所時より近隣のスーパーに協力を得て配達して頂いている。スーパーの他にも近隣のお店での買い物を心掛けている。また、散歩時には近隣住民に挨拶をしている。	地域の一員として自治会の役も担当し、回覧板で行事を知り地藏盆や誓願寺の祭りに参加している。事業所の秋祭りは回覧板や近隣の方へのポスティング、児童館へのお誘いで来所者がある。児童館とは毎月交流しており、レクリエーションを楽しんでいる。ボランティアにより音楽療法が2ヶ月ごとにあり、他に南京玉すだれの披露もある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	買物に近隣スーパーや店舗を利用し、入居者も一緒に行くようにしたり、散歩時に近隣住民に挨拶したりして、交流を持っている。また近隣の医院に主治医になって頂き、情報の共有をしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	開所時より多くの家族に参加して頂いている。本人や家族の意見・想いを聞きとって会議などで共有し、ケアやサービスの向上、行事、家族会などに活かしている。	家族・利用者・地域住民・児童館・地域包括支援センターのメンバーで会議を開催し事業所の実態を知って貰っている。家族全員に案内と議事録を配布して、事業所運営への理解を深めていただいている。会議で出た意見は職員で話し合い、次回の委員会で結果を伝えている。出た意見を基にアンケート(利用者・家族・職員・関係者)を実施し、業務の改善に結び付けられた。	会議のメンバーとして地域の方の関わりが増える事が望まれるので、民生委員や自主消防団の方等への積極的な働きかけを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	上京事業所連絡会やGH部会に参加し、介護保険行政担当者との連携を行っている。	市の担当課には運営推進会議の案内と議事録を手渡している。上京事業所連絡会やグループホーム部会に出席して、顔馴染みの関係で相談などにも出かけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人として身体拘束マニュアルを作成して職員に開示しており、研修も行っている。また職員間でも疑問があれば話し合いを行っている。	身体拘束をしない研修は法人研修で受け、伝達研修をしている。事業所でも年1回接遇の勉強会をしている。玄関の施錠はしない方針である。利用者がトイレから出て、間違っで玄関に行きかけた時等はヒヤリ・ハットとして取り上げ、利用者の混乱を取り除くケアが実践できるように、目配り・気配りの徹底をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内で定期的な研修を行っており、職員全員が虐待について理解し、起こることのないように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内で定期的な研修を行っている。現時点で制度を使っている入居者はいないが、小規模で成年後見制度利用の方がおり、事例検討としている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には十分な時間をとって説明を行っている。不明点等がないかの確認もしており、安心して契約して頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者・家族・外部関係者にアンケートを実施し、意見や要望を聞いている。また入居者には個別で関わる際にも想いを聞くようにしている。その結果を基に改善点を挙げて早急に取り組めるように努めている。	利用者には普段のかかわりの中や、今回取り組んだアンケートの聞き取りを1対1で行う事で、思いをたくさん聞かせて貰った。家族からは運営推進会議・面会時・アンケートで聞きとり、分析・評価した物をまとめ、法人研究報告会で発表した。結果、業務改善や人員の見直しに繋がり運営に反映できた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の見解や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、職員会議やカンファレンスを開催して意見交換をする場を設けており、議事録を作成して職員全員に周知もしている。また、年に1回、管理者との面談があり、自分の思うところを伝える機会がある。必要があれば都度の個人面談も行っている。	職員の意見は朝の申し送り・職員会議・カンファレンス・個人面談で聞いている。全員の意見を聴きたい時はアンケートを行っている。利用者の見守りが手薄にならないように、業務の時間や段取りの変更に結び付ける等、業務に反映できている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	必要があれば統括部長による面談があり、職員の状況は把握出来ている。また手当等の待遇もきちんと配慮されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内で初任者研修を開催しており、職員を対象にした研修も定期的に行っている。また事業所内でも勉強会を行ったり、外部の研修を受けられる機会を作るなど、職員が学べるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内研修参加による職員同士の交流、外部研修や事業所連絡会、GH部会の参加による他事業所との交流が持てる機会を作っている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と話をして要望や想いを聞き、得た情報を基にカンファレンスを行ってケアプランに反映し、職員間で情報共有するとともに本人を理解することや安心した環境になるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人と同様に話をして要望や想いを聞き、家族構成や状況を把握するように努めている。また、面会時などに話し、必要なことは職員間で情報共有するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の意向、本人の心身状態を把握し、話し合った上で適切と思われる支援を提案して実施に繋げている。場合によっては他のサービスを紹介することもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の状態を把握して、出来ることは自分で、必要なら介助もしくは一緒に行い、本人の能力を活かせるよう、またやりがいを持てるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人や家族、職員が良い関係を築き、維持しているように、面会時やケアマネを通して要望や想いを聞く機会を作るだけでなく、本人の状態や支援状況を伝え、相談や情報を共有出来るように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ドライブで馴染みの場所に行ったり、家族にも協力して頂いて入居前から馴染みの美容院や病院、お店へ続けて行けるように努めている。	初回の面接で利用者の今迄の生活や人との関係を聴き、アセスメントシートに記入している。日々の係わりの中で把握したことは、経過記録に書き職員間で共有している。親戚の人や昔の友人が訪ねて来られている。初詣も利用者の希望で馴染みの八坂神社に行った。ドライブがてら懐かしい和菓子を買いに行く等の支援に努めている。職員は2ヶ月に一回、家族に状況報告「はんなり」を写真を付けて送付しており好評である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	必要時には職員が間に入りながら、行事や日々のレクを通して、また日常生活で円滑に交流出来るように努めている。また、個々を知り、トラブルになったり、孤立することのないように座席に配慮するなどしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後の関係は維持出来ていないが、本人が亡くなった時に家族から連絡が来ることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人と話をする機会を持てるように努めている。本人の要望や想いは記録に残し、カンファレンスなどで情報共有し、本人の意向に沿うにはどうしたらいいのかを話し合っている。	日々利用者との係わりの中で意向を聴いている。特に、今回のアンケートは利用者の思いを1対1で聴きとり、今迄に知らなかった思いもたくさん得ることが出来た。カンファレンスをこまめに行い本人本位のケアの実践を検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族に話を聞き、センター方式を作成するなどして情報把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の様子を記録に残して申し送りやカンファレンスで情報交換し、現在の状況や変化を把握出来るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスを行って情報交換や検討を行い、プランに反映して適切な支援が提供出来るようにしている。家族や主治医、訪看などにも意見を聞いたり、相談したりする機会も設けている。	施設ケアアセスメント表MDS2.1を使用して情報収集をおこない、課題の抽出をしている。3ヶ月ごとにモニタリング・計画見直し・サービス担当者会議がおこなわれている。サービス担当者会議には医師の参加もあり、看護師や薬剤師からの意見も聴取している。状態変化時は施設ケアアセスメント表に沿って再アセスメントが行われており、問題提起は細やかである。問題ごとにサービス提供時の記載があり、モニタリングや見直しに役立っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の様子は経過観察記録に記入し、職員間で共有出来るようになっている。記録とともに自分の気づきや思ったことも記入するようにしている。申し送りやカンファレンスで話し合い、プランの見直しなどに繋げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	経過観察記録や本人、家族との話の中から情報を収集し、職員間で共有して臨機応変に対応出来るように努めている。また併設の小規模とも連携をとり、小規模利用者や職員とも交流が持てるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域との交流や主治医との連携を通して、本人が自分らしく生活出来るように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医には月に2回の往診以外にも緊急時、必要時には臨時往診、主治医の医院や提携病院などへの受診も行い、体調管理に努めている。また、必要に応じた歯科往診も行っている。	他府県から来られた利用者が多く、かかりつけ医は近隣の医師を選んで、新たなかかりつけ医になってもらっている。堀川訪問看護ステーションからの訪問看護(週一回)も受けており、医師・看護師ともに緊急時や夜間の対応体制はある。歯科往診や訪問マッサージも受けることができる。往診時は職員がつき、往診記録(体調・気になること聞きたい事・往診結果)に記し職員間で共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1回の訪問看護師の他、小規模の看護師とも連携をとり、気になることは相談出来るようにしている。訪問看護師には緊急時には夜間でも対応してもらえる体制をとっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはサマリーを作成し、必要に応じて主治医にも紹介状や情報提供書の作成を依頼して病院との情報共有に努めている。また退院時にはサマリーや指導書の情報を職員に周知出来るようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	法人内で研修を行っている。また今後は本人や家族に対して、重度化や終末期に入った時にどう対応してほしいかの聞き取りを行い、方針を作成していく予定。	法人では、ターミナルケアを行う方針である。事業所では、「重度化対応・終末期対応指針」を重要事項説明書に明記し、入所時に説明している。医師との協力体制や職員への意識づけ等で事業所の方針が決まっていない。今後、医師との話し合いを続け、利用者(家族)への意向確認・職員への意識づけ・ターミナル研修に継続して取り組み、事業所方針を出す方向である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人で事故等の対応マニュアルを作成して研修も行い、職員が適切に対応出来るようにしている。また救命講習の受講も行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の消防避難訓練を実施し、消防職員から消火器の使用法などについても指導を受けている。	消防署立ち合いのもと、火災(昼・夜)を想定して年2回の訓練を実施している。利用者と共に階段を使って降りる・ペランダへの避難・消火器の実際使用等をしている。法人の救命講習会に参加し、業者によるAEDの使い方の勉強も行い、使用できる体制を整えている。訓練時に地域の方に声掛けを行っているが、参加は得られていない。想定する自然災害は、地震が考えられるが対策は行っていない。備蓄は水・食料・備品等を3日分置いている。	訓練時の地域の方への呼びかけの継続や、想定される自然災害訓練も取り入れられることを提案する。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人内で接遇の研修を行い、事業所として接遇をテーマに研究発表を行ったこともある。入居者に対しては人生の先輩という意識を持ち、言葉づかいには気をつけるようにしている。また、プライバシーを保てるような声かけや対応も意識している。	法人での接遇研修で学びを深めている。トイレ時に大きな声で促さない・申し送り時は周りに聞こえない配慮をする・呼び方は名字で統一しあだ名にならないようにする等、日々配慮し会議でも話し合いをおこなっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者のレベルに合わせて質問や声かけの仕方を工夫し、自分で選択が出来るようにしている。押し付けにならないよう、本人の想いに添えるように気を付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個人の生活リズムを把握し、本人のペースに合わせてられるようにしている。基本的にはプランに沿って援助するが、無理には押し付けず、その時々に応じて対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時に洋服を選んだり、化粧水や乳液で肌の手入れが出来るようにしている。また馴染みの美容院の他、事業所での訪問美容も利用出来るようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	朝・昼はクックデリを使用しているが、事業所では作れない献立やご当地メニューが入居者に喜ばれている。夕食は手作りで食べたいものを聞きながら季節も意識して献立を作成している。入居者の能力に合わせて食材を切ったり、盛り付けをしてもらっている。	昨年より、朝・昼食はクックデリを使用している。余裕のできた時間は、散歩や利用者寄り添うことに使っている。夕食は従来通り手作りとし、利用者の希望を入れて食材を発注している。材料は毎日近くの商店から運ばれる。利用者は野菜の仕分け・調理・配膳・片付けまで職員と一緒にいる。昼食前には、箸を並べお茶の準備にいそむ利用者の姿があった。行事食ではお弁当や太い恵方巻を楽しみ、おやつは自分達で作るホットケーキ・たこ焼きが好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量・水分量は主治医にも相談し、適量を摂取出来るようにしている。記録・把握し、足りない場合は補食・補水も行う。その際は好みに合ったものを選んで摂取しやすいように工夫している。また、状態に合わせて食べやすい形状にしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、実施している。必要があれば介助し、口腔内の清潔が保てるようにしている。また歯科医師とも連携をとり、必要時には往診に来てもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを観察・把握し、失敗のないよう声かけや誘導を行っている。入居者によってはリハパンやオムツも使用しているが、オムツを使用してもトイレで排泄出来るように努めている。	自立の方が3名おられる。排泄表をつけ個々に合わせての介助や、下着の選択をしている。ポータブルトイレは状況により使用するが、現在使用者はおられない。トイレでの排泄を原則とし実施している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	しっかり水分補給出来るように本人が好んで飲めるものを提供したり、食事は食物繊維などが摂れるように工夫している。体操や散歩などで運動の機会も作っている。また主治医とも連携し、上手く排便コントロールが出来るように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	全員が週に2～3回は入浴出来るように、入浴表を見てその日の入浴者を職員で決めているが、体調などによって順番を入れ替えるなど臨機応変に対応している。また午前・午後の選択をしてもらったり、入浴剤を使用するなど、ゆっくり楽しんでもらえるように努めている。	利用者も職員も全員女性である。週2～3回の入浴をしている。衣服の準備段階から一緒に行い、ゆっくりと憩いの時間を過ごしている。湯上りに、愛用の乳液や化粧水をつけ肌を整えている。備えてある入浴剤の中から、好みを選び使用する方もいる。また、季節湯も楽しんでいる。入浴は好きな方ばかりで拒否は見られない。二人介助が必要な方がおられるが、機械浴の利用者はいない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は入居者の希望や状態に合わせて臥床してもらっている。夜間はゆっくり休めるように室温や湿度の調整をしたり、足が冷える方には湯たんぽを使用するなど工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬の変更があれば職員間で情報を共有し、把握出来るようにしている。服用後の状態や変化は記録に残し、主治医に報告・相談して連携をとっている。誤薬等の事故がないよう、セット時には職員2名でのチェックも行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理や塗り絵、掃除など、個々に得意なこと、好きなことを把握し、提案している。皆で一緒に体操やレクを行うこともある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩やドライブは希望を聞き、行きたい方を優先している。また普段外に出たがらない方にも楽しんで頂けるように外食を企画することもある。家族と一緒に外食や買い物に行く方もいる。	散歩は毎日行く方もおられるが、声をかけても「身体がしんどい、花の世話で十分。」と断る方等、さまざまである。職員は促しを行い平均的には週2～3回は散歩に行っている。また、必要時の買い物同行もしている。ドライブは同施設内の小規模多機能デイサービスの利用者と一緒に、利用者の希望に合わせて出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	必要なものは立替金で購入したり、家族が持参しており、現状では入居者が現金を所持して買い物に行くことはない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から本人宛ての電話や手紙があれば取り次ぐようにしており、携帯を所持して自分で連絡をとる方もいる。また、事業所から家族へ送る近況報告の手紙に一言書いてもらうこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎日清掃を行って清潔を心掛け、室温や湿度にも注意している。また通路や手すりの周りには極力、物を置かないようにし、入居者が安全に移動しやすいように配慮している。リビングには季節の花や壁飾り、絵などを飾り、季節を感じられるようにしている。	南側の窓からは温かい春の日差しが射し明るい。外からの騒音は聞こえない。ベランダに植えられたチューリップや苺の水やりは利用者がおこない、日中のほとんどを水槽の金魚とともにリビングで過ごす。自分の洗濯物は自分で干し取り込む。靴下の干し方にもこだわりを持っている。仲良しどうしでくつろぐ利用者の表情は、穏やかな笑顔である。換気や温度・湿度調整もおこない、利用者と一緒に掃除は毎日しており清潔感がある。	リビング全体はとても清潔感があるが、和室部分に煩雑さがみられた。全体の調和の為に、諸物品の片付けを一工夫されることを望む。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者同士の関係性を考慮した席替えを行ったり、ソファや畳の小上がりでも一人で若しくは入居者同士で好きな時に過ごせるように家具の配置も工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時にはなるべく使い慣れた、馴染みのある家具や物品の持参をお願いしたり、家族の写真を飾っている。また環境整備を行い、清潔で気持ちよく過ごせるように努めている。本人の状態に変化があった時には安全に過ごせるように模様替えをすることもある。	居室に通じる壁に行事写真が並んでいる。家族来訪時に好みの写真を提供している。全室畳部屋でベッドが設置されているが、一人だけ畳で滑る危険がある為カーペットを敷かれている。使い慣れた家具が並び、中でも一面鏡の鏡台は利用者の歴史を感じる。筆筒・仏壇・椅子・写真・孫の書いた絵・自作品等、利用者の動線に配慮し設置されている。それぞれに落ち着きのある室内である。適時換気し、利用者と一緒に毎日掃除をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	事業所内は全面バリアフリー設計になっている。壁にカレンダーや時計の設置、トイレドアに「トイレ」書いた紙を貼るなど、日時・場所がわかりやすいように配慮している。また建物内全体に手すりを配置し、安全に移動出来るようにしている。		